

所内研究発表会発表要旨

『入中論複註』において批判される
「ある者」について

研究生 松本 恒爾

Jayānanda による *Madhyamakāvatāra* に対する複註 *Madhyamakāvatāra-tīkā* 以下 MAṬ) Chap.12-v.5 において、「ある者」の五智説に対する批判が行われている。本発表では、この「ある者」が *Abhayākara-gupta* である可能性について検討を行った。この検討の詳細は、MAṬ Chap.12-v.5 のテキストと和訳とともに、*Acta Tibetica et Buddhica vol.5* に『*Madhyamakāvatāra-tīkā* Chap.12-v.5 和訳研究』として掲載予定である。しかしここでは、Jayānanda と *Abhayākara-gupta* の生存年代に関する論考を欠いていたので、ここで補遺として両者の生存年代を推測する資料をあげておきたい。

・ Jayānanda の生存年代について

(一) Jayānanda はカシミール出身であり、チベットに *mDo sde 'bar* とともに多くの中観論書の翻訳を手がけた。

(二) *gZhon nu dpal* (1392-1481) によれば、*Gsang phu ne'u thog* (1073 年建立) において、*Phya pa chos kyi seng ge* (1109-69) と中観思想について論争を行ったとされる。

(三) *Sā kya mchog ldan* (1428-1507) によれば、*Phya*

pa との論争後、チベットを去り、五台山に向かったとされる。

(四) 明代 1447 年に複写された中国語とチベット語との二言語訳 *Ratnagunasamcayagāthā* のコロフォンには、翻訳年に関する記述はないが、西夏五代皇帝仁宗 (1139-1193) と国師「拶也阿難捺」(= Jayānanda) 、法師「遏阿難捺吃哩底」(= Ānandakīrti) の名前が記されている。

(五) 西夏語訳経典には、Jayānanda と Ānandakīrti の名前がたびたび記されており、二人が仏典の西夏語翻訳事業に深くかかわっていたと考えられる。また、この事業は、仁宗の治世の初期 (1150 年から 1160 年代の初頭まで) に行われたと推測されている。

(六) MAṬ のコロフォンによれば、MAṬ は西夏において、Jayānanda 自身とチベット人翻訳官 *Kun dga' grags* (= Ānandakīrti) によってチベット語に訳されたとされている。

以上のことから、Jayānanda の生存年代は 12 世紀の初頭から半ばであると推測される。

・ *Abhayākara-gupta* の生存年代について

(一) *Sum pa mkhan po* (1704-1788) によれば、*Abhyākara-gupta* の生存年代は 1064 年から 1125 年まづであり、*Vikramasīla* の僧院長となったのは、*Rāmapāla* の次代 *Kumālapāla* が大臣の *Lavasena*

によつて退位させられた年だとされている。

- (2) *gZhon nu dpal* によれば、*Kālacakrāvatāra* が著作された年は、1087年か1087年と1072年とされている。

- (3) チベット語訳ロクロンオンによれば、*Abhayapaddhati* が著作された年は *Rāmapāla* 王治世の53年、*Amāyamañjari* の著作が完了した年は *Rāmapāla* 治世55年目とされている。

- (4) サンスクリット語「チベット語訳」それぞれのロクロンオンによれば、*Munimatālaṅkāra* が著作された年は *Rāmapāla* 王治世63年目とされている。

- (5) *Rāmapāla* の在位は1077年から1119年と推定、かつ1084年から1126年と推定されている。

- (6) *Kumārāpāla* の在位は1120年と、かつ1226年から1130年と推定されている。

以上のことから、*Abhayākara* の生存年代は11世紀半ばから12世紀の前半と推定される。

・参考文献

・ Bühnemann, Gudrun

1991: *Niṣpannayogāvali* Two Sanskrit Manuscripts from Nepal, The Centre for East Asian Cultural Studies (Tokyo).

1992: Some Remarks on the Date of *Abhayākara*

and the Chronology of His Works, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* Bd.142.

・ Dunnell, W. Ruth

2009: *Translating History from Tangut Buddhist Texts*, Asia Major, third series, vol.22-1 pp.41-78.

・ Roerich, George N.

1949: *The Blue Annals*, Parts I&II (Bound in One), Culcutta, (repr. Motilal Banarasiass 1976).

・ van der Kuijp, L. W. J.

1983: Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology -from the eleventh to the thirteenth century-, Franz Steiner (Wiesbaden).

1993: Jayānanda A twelfth century Guoshi from Kashmir among the Tangut, *Central Asiatic Journal* 34 (3/4) pp.188-197.

・ Ye Shaoyong

2009: A preliminary survey of Sanskrit manuscripts of Madhyamaka texts preserved in the Tibet Autonomous Region, Sanskrit manuscripts in China, Proceedings of a panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies October 13 to 17 pp.307-335.